大東文化大学紀要四十五号

主体と「は」

Subject and 'Wa'

柏木成章

Shigeaki KASHIWAGI

要旨　助詞「は」の根本的意義と基本的用法を、特に「が」との対比において検討する。

1

「は」（及び、それに相当する機能）の出現位置に着目し、左のように分類する[1]。

(1)　顕在

(2)　潜在

(1)は云うまでもなく、「は」が形として現れている場合である。(2)は「は」が形として現れていないが、それに相当する機能＝作用が想定される場合である。（ただしここでは、いわゆる助詞の省略の場合は一旦度外視する。）以上(1)・(2)の大別の下に、各々の具体的ケースを次のように考える。

(1)　顕在

(i)　先置……文の冒頭に通常の語順として置かれる（倒置でない）「は」。

①　人間は一本の葦のようなものである。

(ii)　後置……「は」が先置のそれに続き、その後にもう一度現れる場合。

②　私は数字や物理はどうも苦手だ。

(iii)　並置……複文において、従属節・主節双方に「は」が現れる場合。

③　日本酒は毎日飲めるが、ウイスキーはそうは行かない。

（右例三つめの「は」は本稿規定の(1)―(ii)「後置」に当る。）

(2)　潜在

(i)　前置……いわゆる「陰題」で、現象文等を構成する「が」の前方に存すると思しきもの。

④　おや、雨が降っているよ。

（「雨が」の前方に「Xは」相当の機能を想定する。）

(ii)　背置……連体修飾節のかかる名詞に想定する。[2]

⑤　目の前に、美しい緑に包まれた村が見えてきた。

（「村は……」という述定を想定する。）

徹底的に基本的な類型（「は」の位置類型）としては、右の二種五類、すなわち、「顕在先置」・「顕在後置」・「顕在並置」・「潜在前置」・「潜在背置」が考えられるが、以下では便宜上、「顕在」・「潜在」の呼称を略し、上の意味で単に「先置」・「後置」・「並置」・「前置」・「背置」と呼ぶこととする。

2

右の分類法に見られるように、本稿では「有題文」（顕在）はもとより、「無題文」もすべて「潜在」的に「は」（及びそれ相当の機能）の支配・影響下にある、一種の見えない有題文としてとらえている。換言すれば、日本語の主体は常に、顕在・潜在二様として現れる「主題」（＝「は」及びそれ相当の機能）化の構えの下に文を述べていると解釈するものである。この姿勢＝態度を「主題―構え」と称し、以下この「構え」が1での二種五類においていかに実現されているのかやや詳しく見てゆきたい。

「は」の根本的作用＝機能はいわゆる「題―述」構造の「題」を取りあげ（＝「提題」）、その「解説」としての述語に支配を及ぼす、ということである。では「は」は、何から何をどのように取りあげるのであろうか。それは言うところの「取りたて」の一種なのであろうか。

しかし「は」の「取りたて」られ方は他の「取りたて」の助詞とは異なる。一般に「取りたて」は有限の全体＝背景を前提とし、その中の一つを他と区別する。

⑥　彼だけが律義に遅刻もせず毎日やって来た。

右の「彼」は明らかに特定・有限の集合内の一メンバーに他なるまい。これに対して、

⑦　彼はとっても優しいいい人です。

の「彼」は決してそのような一メンバーではない。「彼」は「彼」以外の一切の存在でないあるものなのである。「彼」が排除するのは無限の全体＝世界なのであり、そこから取りあげられた「彼」が総体としての述語（「とっても」以下）に対応しているのである。主題化とは右のような作用だと筆者は考える。「対照」という用法が考えられるとすれば、右の構造をレトリカルに変形し、例えば、「男」と「女」という一対のみの（意識上の）全―世界を構成し、互いが互いに排除された無限の剰余の「代表」として一者で全体を形成するあり方において可能であろう。この場合、構成メンバーは基本的に二者でしかあり得ないから、言うところの「取りたて」の有限メンバー性と現象的には同一となる。この用法と「が」の「排他」の用法との差異については以下で適宜考えたい。

例文②において、先置の「は」（「私は」の「は」）に続く後置の「は」（「数学や物理は」の「は」）は「対照」的である。なぜこの「後置」の「は」はそうなるのか。「は」は先述のように自ら（＝主題）以外の無限の一切を排除する。それは逆に言えば、自らの領域それ自体は完全に他の侵入を許さず確保するということである。この性質は、「範囲の限定」として数量詞における「は」の現象として知られている。

⑧　まあいくらなんでも百人は来るだろう。

右の「百人」は「最低限」の数であって、「は」の自己領域確保＝限定の性格をよく示していると言えよう。一般の名詞はこのような量的最低限を示すことはその性質上不可能だが、話題の範囲を限定することはできる。例文⑦でいえば「私」が話題の範囲であって、これと無関係な解説を述語に据えることは許されない。これは、

⑨　象は鼻が長い。

⑩　カキは広島が本場だ。

⑪　この匂いはガスが洩れているのだ。

のような文でもすべて同様であるし、

⑫　ボクはウナギだ。

のような「ウナギ文」でも勿論そうである。

さて例文⑦は「私」に関して述べられるべきことの中で「数学や物理は苦手だ」という述語が選ばれたのであるが。ここにおいて、「数学や物理が苦手だ」とある場合とは何が異なるのであろうか。一体、(先置の)「は」が提起されれば、そこではすでに関説すべき範囲が明確にされてしまっているのである。以下述べられるあらゆることは先置の「は」で示された範囲内での出来事とならざるを得ない。すなわち、ここですでに「は」は先述の「無限」排除性を文字どおり発揮することはできず、その取り扱うべき「世界」はすでに真の「世界」＝無限世界ではなく、ある名詞の枠内に、その意味では「限界」を有して存在せざるを得ない。このようにある「限界」＝「枠」を与えられた中での「主題—構え」は、必然的に、先述の「対照」の構造と類似して行かざるを得ないであろう。これに対し、ここで「が」が用いられれば、それは格助詞として事象の記述に徹するものとして右の「主題—構え」と関わりなく、むしろ、「潜在」における「前置」と関係するものとして考えられるべきものとなるであろう。論の進行に応じ、ここで一旦「潜在」の問題の検討に入ることとしたい。

3

本稿の立場では、すでに1での分類において察せらるるごとく、純粋の「無題文」というものは想定されない。これを具体的に示すのが「潜在」の概念である。いわゆる現象文において、例文④のような「雨が降ってるよ」式の無題文は、勿論、従って、「Xは」という「陰題」が想定され、その「X」は当然、現象の本拠たる「いま・ここ」＝眼前の状況そのものに他ならない。現に目睹し、発話している以上、該状況は発話の当然の与件として考えられ、話者はまさにそれについて「解説」するが、ここでは「主題」は言及不要の大前提として顕在化されることがない。いわゆる「排他」の「が」のように考えられる場合、

⑬　君が主役だ。

のような、「お前が犯人だ！」式の無題文といえども、また、右のような規定を免れるものではない。これらは、「Xは」において、「X」＝「この場合、この集団、この時点」というような特定の文脈的状況が設定され、その支配＝前提の下に該発話が成立せしめられているものと解される。

⑭　昨日、アメリカ大統領が来日しました。

のような、時の流れの中に生起する出来事を報告する文としてよく現れる右のような類型も、「時の流れ」そのものを大「主題」とし、先述例

文④のような「空間的」状況に対する「時間的」状況として「いま（＝当時）・ここ（＝当所）」を想定するならば、強ち広義の主体の「主題―構え」を排除するものとは限るまい。もっとも、右のような考え方に立って「潜在」する「主題」（らしきもの）を追求・想定しようとしても容易に見当らないような場合もある。

⑮　私の妻、これこそが私のお宝そのものなのです。

における「主題」とは何なのであろうか。ここでは言うまでもなく、「私の妻」＝「これ」である。「私の妻」は一種の独立語であるが、「これ」によってその内容が反復されている。「私の妻」に「は」を付けることはできない。では発話主体＝「私」が「主題」なのであろうかと考えても、その考えは直感的に斥けられよう。すなわち、ここには文字通り、「は」を付して復元＝顕在化できるような「主題」はないと認めざるを得ないのである。ではこれは純粋の「無題文」で、従って先の二種五類の分類法とその大前提は破綻せざるを得ないのだろうか。確かに「は」そのものは現れない。しかし「は」相当の機能が存在すれば「主題」とするというのならば、ここもまた、「私の妻！」なる呼格まがいの独立語を広義の「主題」として指定しても構わないであろう。確かにこの「私の妻」と「これ」の関係は「象は鼻が長い」や「外は雨が降っている」の「象」と「鼻」、「外」と「雨」の関係のような平淡な「題―述」関係に包摂されるものではない。しかし「主題」化という作用は、先述のように、無限世界を背景として特定の唯一物を取りあげるという強烈な心的作用なのである。一般にそれらは「は」を介して「解説」の対象となる。しかしその冷静な操作の暇（いとま）なく、その「主題」自体がただちに「解説」の一部に転じてしまうなうなものとして⑮の例文は考えられるのである。このような解釈は当然、「わっ！火事だ！」「吉野家呉服店」（看板の表記）のような「一語文」（後者もそう考える。）の本質（そこにおける「主題」の「潜在」化）の検討と関わってくるが、本稿ではこれ以上立ち入らない。

さて「潜在」のもう一つの類型は「背置」（これまでのそれは「前置」）である。いわゆる従属節における「は」の出現（の有無とその用法）の問題がこれに該当するが、ここに具体的に立ち入る用意は本稿にはない。単に、連体修飾節における「は」の用法（本稿でいう「背置」における現象）と、同じく「後置」における現象の類似性（＝「対照」化）、および、各従属節自体の「主題」性（「彼はくれば、……」・「彼はくると……」・「彼はくるから、……」等の（当該節内に収まることの）困難性の示唆する）におけるその「背置」性、また、例文⑪「このにおいはガスが漏れてるよ」という「破格」の構文[3]の、いわゆる連体修飾における「外の関係」（＝「ガスの漏れているにおい」）との並行性、等々の現象を着眼点として指摘し、ここにおいて先述例文⑮の場合と同様、いわば『は』とでも表記したい一種の「零記号の辞」的作用を探究すべき課題を自ら掲げるのみである。本稿の立場よりするとき、「顕在」にも増してこの「潜在」の「は」（『は』）の研究こそ根本と考えられるが、いまはその理論的要請を示すに止まらざるを得ない。

4

以下では「は」（・「が」）に関する若干の個別的諸例を設定し、それらに対する本稿の立場からの解釈、乃至解釈の見通しを述べる。特に、日本語教育上も重要な、「は」と「が」の使い分けの問題を中心とする。

「は」と「が」の使い分けについては、基本的に次の三つの場合が考えられる。

(a)「は」と「が」の交換が全く不可能。

(b)交換不可能ではないが、当該箇所において不適当なニュアンスを生じる。

(c)交換可能だが、別箇の主体の意図を示すこととなる。

とりあえず、右三つの基本的な場合を念頭に、以下では特定のあるテキストを取りあげ、その本文冒頭から遂次「は」・「が」の交換を「実験」し、そこにおける「現実」を検証することとしたい。テキストとしては、現代日本の全く標準的・実用的文体を全く常識的・社交的に提示しているものと思しい、ＮＨＫ「きょうの料理」（特集は「徹底マスター！豆腐料理」）二〇〇六年七月号を用いる。

同誌7ページにある「は」と「が」は次の7つである。

⑯　豆腐の約90％は水分。

⑰　豆腐料理のコツはこの水分をいかにしてきるか、にあります。

⑱　食感の違いが生み出す新しいおいしさが発見できます。

⑲　自分で選んだ安心材料でつくれて、しかもできたてが食べられる。

⑳　手づくりは楽しい！マイ・トーフ

⑯は(c)に該当しよう。「豆腐の約90％が水分。」でも十分通じるが、「豆腐」を他ならぬ「特集」とする本号の姿勢が「は」を選ばせているのであろう。⑰の「は」はずっと「が」に置き換えにくい。もしそうすればここでは不要な力み＝強調のニュアンスが付与されてしまうであろう。⑱の一番目の「が」は(a)に該当する。連体修飾節内の「が」である。二番目の「が」も(a)に当る。⑲も(a)に該当する。もし「は」とすると、「できたて」の場合に限り、「食べられる」とでも解される他なく、文意が通じない。⑳は⑯と同じく、「が」にしようと思えばできる。「手づくりが楽しい！マイ・トーフ」。しかし、⑯同様、「豆腐」を中心課題とし、それを品よく解説しようとする穏やかな姿勢が「は」を選ばせているものなのであろう。

8ページの「は」・「が」は次の8つである。

㉑ このテーマの放送はありません。（以下では例として扱わない。）

㉒ 大豆の浸水時間は12時間前後。（写真説明）

㉓ 朝いちばん早いのは……

㉔ 朝5時。前日から水に浸しておいた大豆を、ていねいに洗うところから、豆腐作りが始まります。

㉕ なめらかな豆乳がおいしい豆腐の第一歩。

㉖ 105℃近くの高温に煮えた、ドロッとした液体が機械を通ると、豆乳とおからに分かれて出てきます。

㉗ 豆乳は、なめらかな舌ざわりに仕上げるため、さらに目の細かい布袋でこしていきます。

㉘ おからは板状になって出てくる。（写真説明）

㉑の「は」は否定文の「は」として「が」に置き換えられないケース。㉒の「は」は㉘の「は」と同じく、時間的推移の中の一部として出現するというとらえ方なら「が」でも可能なケースだが、そうせず、一枚一枚の写真について丁寧に解説する姿勢なのであろう。㉓も同断。㉔は上の理屈で行けば「は」でもよさそうになるが、ここは日常的な事象推移の一コマとして、肩の力を抜いた描写法をとっているのであろう。㉕も㉔と同断のところがあるが、ここを「は」とすると、当該ページ（町のお豆腐屋さんに密着！豆腐ができるまで）の内容と調子にそぐわない、大上段に振りかぶった「最善の豆腐製造法とは何か？」といったテーマの文章の一部めいてしまうので、そのニュアンスが回避されているのであろう。㉖は従属節内。㉗は置き換えるとすれば実際は「を」となるべきところだが、普通に主題化されているのであろう。㉘は前述。

9ページの「は」・「が」は次の16個である。

㉙ まずは、木綿豆腐から。

㉚ つくるのに時間がかかる木綿豆腐。

㉛ 固まった豆腐は櫂で大きくくずし、小さな穴がいくつもあいた型箱に移します。

㉜ 型箱の内側には木綿布が敷いてあり、これが木綿豆腐の名前の由来。

㉝ 次は絹ごし豆腐。

㉞ 水けを落とさず、豆乳をそのまま固める絹ごし豆腐は、穴のあいていない木製の型箱でつくります。

㉟ あとは約1時間かけて固まるのを待つだけです。

㊱ くずした豆腐は、温かいうちに木綿豆腐用の型箱に入れて固める。（写真説明）

㊲ でき上がった豆腐は、くずさないように型箱からそっと水中へ落とし入れます。

㊳ 昼ごろにはすべての豆腐が店頭に並びます。

㊴ じつはここからがまた大変。

㊵ 釜をはじめとした機械類をすべて洗う作業は、大豆なしで豆腐づくりを再現するようなもの。

㊶ これを2度繰り返し、翌日の仕込みを終えるのは、夜7時を過ぎるそうです。

㊷ 1つの型箱から絹ごし豆腐が約30丁できる。（写真説明）

㉙は副詞「まず」に「は」が付く。本頁にはこれと同様、「は」と「零」の選択として扱うべき例が多い。㉚は連体修飾節内。㉛は先述㉗と同断。㉜は㉙のように「は」を付加するか否かのケース。この場合はなくても通じようが、やはり丁寧に主題化されているのであろう。㉝の「次は」も、先述㉙の「まずは」及び後出㉟の「あとは」と各々照応しているかのようである。㉞の「は」は後出㊵・㊶と同じく、比較的長大な主題を形成する。しかしこのような場合も、2で述べたような「は」の性質は一貫していると考える。どのような複雑な規定＝修飾部分を名詞（㊶のような形式名詞「の」を含め）が有していようとも、その「主題」としての「唯一性」（＝「他」の無限排除）の想定は可能だからである。㊱は前述㉘と同断。㊳「昼ごろには」は2で言及した「範囲限定」と同様のニュアンスで、「少なくとも」（＝ここでは「遅くとも」）の意を暗に帯びる。㊴の「じつは」は勿論、全体で「副詞」のように考えられるが、これをしも「～は～が」構文の一つとして取り上げることは不可能であろうか。㊷は従来の写真説明部（＝㉒・㉘・㊱）と異なり、「が」が用いられているが、「大豆の浸水時間」（㉒）・「おから」（㉘）・「くずした豆腐」（㊱）のように一つ一つ丁寧に取り上げて解説を施すべきやや疎い対象に比べ、「絹ごし豆腐」は余りにも日常的に親しく、その影響＝作用がここで時間的推移の一描写の中に「絹ごし豆腐」をさりげなく登場させるような説明文をもたらしたものであろうか。実際、「一つの型箱から絹ごし豆腐は約30丁できる」でもいいと見る向きにはいいのであろうし、語順を変えて「絹ごし豆腐は一つの型箱から約30丁できる」なら一層「いい」のかもしれないのである。

10ページの「は」と「が」は25個である。（急に多くなるのは7・8・9ページと異なり、写真や絵より活字部分の占める割合が大きくなるため。）11ページでは31個で、「豆腐のマメ知識」としての一問一答形式の記事が見開きで続いている。ここでは両ページ一括して扱う。

㊸ 豆乳をそのまま固める絹ごし豆腐は、水分の流出がないため、水溶性のビタミン（ビタミンB群など）を多く含みます。

㊹ 木綿豆腐は製造工程で水分が抜けるため、濃縮されて、大豆がもつたんぱく質やカルシウムなどが多くなります。

㊺ また、近ごろ話題の大豆イソフラボンは、主に大豆胚芽に多く含まれるフラボノイドの一種です。

㊻ 豆腐が今より大きく、細長かったため、長いもの（銃、鍬（くわ）など）を数える「丁」を使ったといわれます。

㊼ 昔は豆腐の大きさが地域によって違いましたが、最近は1丁（1パック）250〜350gがほとんどです。

㊽ ただし、島大豆と呼ばれる沖縄の豆腐は、1丁が1kg近くもあり、大きさも2倍程度あります。

㊾ 水分が少なく、保存性が高い。（写真説明）

㊿ 凧でおなじみ、奴の着物には左右に四角い紋があった。（挿絵説明）

(51) 「やっこ」という言葉はここから来ているとか。（同右）

(52) 豆腐のルーツである中国でも、豆腐のことは「豆腐」と書きます。

(53) 中国で「腐」という字は、ブヨブヨと柔らかいものを広く指し、豆腐は「柔らかに豆」を意味しているのです。

(54) ちなみに、豆腐は中国から朝鮮半島、さらに東南アジアにまで広がっていますが、朝鮮半島では「トブ」、ミャンマーでは「トーフー」、ジャワ島でも「トーフ」というように、多少の相違はあっても、ほぼ共通した呼び名が使われています。

(55) 豆腐の消費期限は、絹ごし・木綿にかかわらず、製造後三日間が目安です。

(56) パックの中の水が黄色っぽくなるのは、大豆の色素であるフラボノイドが溶け出しているだけで、腐敗の目安にはなりません。

(57) 一度に使いきれなかった豆腐は、密封容器に移し、きれいな水をかぶるぐらい入れて、豆腐が空気に触れないようにしてから冷蔵庫で保存します。

(58) ビールにぴったりの枝豆は若どりの大豆。（挿絵説明）

(59) 正月料理の黒豆は、表皮が黒い大豆の一種。（同右）

(60) 淡い緑色の豆腐は青大豆が原料。（写真説明）

(61) 緑や黒の豆腐は何でできている？

(62) 豆のなかでは大豆が最もたんぱく質の含有量が多く、豆腐はこのたんぱく質などをにがりなどの凝固剤で固めたもの。

(63) ほかの豆では豆腐はつくれません。

(64) 緑色の豆腐には、枝豆豆腐の名で市販されているものもありますが、枝豆は大豆の未熟な状態なので、やはり大豆の仲間といえます。

(65) 大豆から豆乳をつくる過程で泡がたくさん出ますが、これを抑えるために使われるのが消泡剤です。

(66) 泡を消すことで、きめこまやかでなめらかな豆腐ができます。

(67) 消泡剤としてよく使われるのは、アイスクリームや菓子にも広く利用されている食品乳化剤です。

㊽ 卵や大豆に含まれているレシチンや、油を食べたとき体内で大量につくられるグリセリン脂肪酸エステルなどが成分となっていて、長く人間に摂取されてきた、安全性の高い添加物といえます。

㊾ 豆腐用大豆の8割以上はアメリカ、カナダなどから輸入されています。

㊿ パックに「国産大豆使用」という強調表示をするには、国産大豆を100％使用していることが条件と定められていて、国産と輸入の大豆を混ぜている場合は、国産大豆の割合を表示する必要があります。

(71) また、よくある表示に「遺伝子組み換え大豆とは、特定の除草剤に対する耐性をもつように改良された大豆のこと。

(72) 遺伝子組み換え大豆とは、特定の除草剤に対する耐性をもつように改良された大豆のこと。

(73) 豆腐用として遺伝子組み換え大豆が輸入されることはありませんが、畑や船のコンテナなどでごくわずかに混入してしまうことがあるため、意図しない混入が5％以下なら、「遺伝子組み換え大豆不使用」の表示が認められています。

見られるように、きわめて標準的で淡々とした、一種「公的」な文体である。一定水準以上の日本語力を有する外国人留学生であれば、これらの「は」・「が」はほぼ誤りなく用いうるであろう。右用例㊸～(73)を通じて、いうところの「対照」や「排他」と積極的に目すべき例が皆無な点も興味深い。文飾を一切排すればこのような現象が生じるのであろうか。いずれにしても、右各例は必ずしも逐一の検討を要すべきもののようには考えられないので、以下では若干の例についてのみ取り上げる。一般に右のような文体は大変「律儀」な印象を与える。例㊹の「朝鮮では…」・「ミャンマーでは…」の一種の（「対照」ならぬ）「並置」は丁寧な解説意識を伺わせるし、例㊼の「昔は…」・「最近は…」も「対照」ならぬ穏やかな「並置」意識をその内実として持っていよう。「は」・「が」交換という見地から興味が持たれる（留学生等が迷いうる）例としては、例㊺が考えられるよう。ここでの「……の消泡剤です。」の部分は、「消泡剤は……」という形をとることも可能である。現に、例㊺「豆腐の消費期限は……」は、「製造後三日間が豆腐の消費期限です。」とも言い換えられる。例㊺は実は、「消泡剤って何？」という問いに対する答えの一部（＝冒頭部分）なのである。要するに「X（と）は何か」に対する答えが「～（の）がXだ」という形になっているものと考えられる。「Xは？」に対し、「Xは…」と答えること（＝「消泡剤とは…」）も勿論可能であるが、この場合の「が」に対する本稿での「（潜在）前置」に当るものは何なのであろうか。それは該やりとり（＝問いと答え）の「文脈」そのものなのではないか。すなわち、しいて言語化しようとすれば、「それは、そのお尋ねに対しては、お答えすれば」等々の、単純に顕在形式としての「は」（＋）名詞の形に置き換え得ないところの一種の「主題」＝『は』が（潜在）前置されているのではないか。例㊺も実は、「どのぐらいもつ？半分残ったら？」という問いに対する答え（の冒頭部分）であるのだが、前記「文脈」自体の主題化意識の強弱の差が二つの異なった答えの形をもたらしているのではないか。実際、例㊺に続く例㊼も、形式上は㊺と同じく、「消泡剤と

してよく使われるのが……」とすることも可能だったはずである。しかしここには応答＝対応すべき（前記のごとき）「文脈」が（すでに）存しないと主体は判定したのであろう。「が」に関しては、

⑭ 君は役者だねえ。

⑮ 僕が役者だって？

⑯ これは李朝です。

⑰ ほう、これが李朝ですか。

のような、「は―が」対応とでも称すべき現象がある。右⑮・⑰に見えるような「は」に対する「が」の受け答えも、「では、それでは…」等々と（きわめて）不完全にしか言語化しえないところの一種の対応＝「文脈」意識が作用しているものなのではないか。「（潜在）前置」の概念＝『は』の概念を右のように拡張していくとき、主体における行為としての「は」（乃至『は』）の意義が果たしてよりよく把握されるものか否か、今後多くの場合にわたっての検証を要することを認め、本稿をそろそろ閉じることとしたい。なお同誌12・13ページにおいても、

⑱ 絹ごし豆腐は約90％が水分でできています。

のような、既述⑯「豆腐の約90％が水分。」と対置されるかのような例、

⑲ 絹ごし豆腐はパックから出してサッと洗い、6等分に切る（写真①）。

⑳ 細ねぎは小口から刻む。

㉑ みょうがは茎の部分を少し切り取り、縦半分に切る。

のような、前述例㊹・㊼と関連するような「並置」的「は」の例等が見えるが、これらも今後の検討課題に委ねたい。

注

(1) 本稿は拙稿「は」と「が」、一九八三・三、大東文化大学紀要第21号（人文科学）、に続くものとして、その所説を前提としている。

(2) 久野暲「関係節と主題」『日本文法研究』一九七三・六、大修館書店所収、では『関係代名詞化される名詞句が、普通の格助詞を伴った名詞句ではなくて、関係節の主題、すなわち、「名詞句＋ハ」である』とされている。

(3) 野田尚史『「は」と「が」』、一九九六・一一、くろしお出版。